

<特集:ツアーで出会う>

私の〈Tourism〉

-これまでのツアーの経験から-

富永悠介

これまでのツアーを振り返る

これまでなんらかの形で関わってきたツアーについて、私に何が書けるだろうか。手順として「ツアーって何だ」という大まかな定義でもしておいたほうがイメージを掴んでもらいやすいのかもしれない。しかし、これまで色々な立場から様々なツアーに参加させてもらい、それら思い返せば、どれ一つとしてスケジュール・メンバーが同じツアーはなかった。また、本特集に寄せられた文章からも分かるようにツアーへの考え方は一人ひとりそれぞれ違うはずだ。それだけにツアーを一般化、或いは定義して「はい、これがツアーです」と見せるのはなかなか難しい。さらに、自分にとってこれまで身近だったツアーについて言葉にすることが、思いのほか困難だということに今になって気が付いた。二進も三進も行かない状態に、さてどうしたものかと手が止まってしまう。

私にとっての最初のツアーは、今から7年前の沖縄ツアーに遡る。とはいっても、中途半端な関わり方しか出来なくて、参加したとは到底言えないツアーだった。いまでもその時のことをチクチク言われる方もいらっしゃいますが(笑)、それでも懲りずに沖縄にはたびたび訪れる機会があったし、台湾や韓国、フィリピンでのツアーや、後で紹介する筑豊をまわるツアーやベトナムでのツアー(これはちょっと特殊で宣教に着いて行った)に参加する機会に恵まれた。どれも比較的長い期間で行われ、大人数だった。疲れたけど、それ以上にどれもが楽しかった。

一方で、台湾に住んでいたときには、ハンセン病療養施設の楽生院・基隆・霧社をよく訪ねた。日帰りできるこれらも前述のようなツアーに含むのかと言われれば、ちょっと迷う。何週間もお出かけすることはないし、私一人で行動するときもあったからだ。かといって厳密にツアーを線引きする必要もないだろうし、これから書くことが楽生院・基隆・霧社での経験と無関係だとは思わない。だが、とりあえず、長い期間大人数でお出かけする(行動を共にする)イメージを

持っていただければ、その雰囲気や様子が少しは伝わるのではないかと思う。

そんなツアーのスケジュールもバリエーションに富んでいる。博物館・記念館といったミュージアム、祈念碑などのモニュメントを見に行くこともあれば、それぞれの地域で活動・運動をする団体や活動家を訪問したこともあった。フィリピンでは畑仕事のお手伝いをさせてもらったし、韓国では水曜集会に参加する機会もあった。確か小田実さんに『何でも見てやろう』という表題の著作があったけど、私がツアーに参加して受けた印象はとにかく「何でもやってやろう」的な雰囲気だった。かといって「肉弾三銃士」のように当って砕ける！という無茶なことはしない（いや、当って砕けたことがあったような気もする…）。とにかく、ツアーは、体を動かしてなんぼの活動だ。

私がツアーに参加したいと思うのは、ツアーがとにかく楽しいからだ。ツアーは楽しい。これに尽きる。しかし、ツアーに参加すればするほど、自分の立場や社会について考えずにはいられなくなり、正直言って居心地が悪いと思うときが増えた。楽しくて参加していたのに、ミイラ取りがミイラになった気分で、なんか複雑な気分だ。

そんな居心地の悪さも含め、ツアーで感じたこと・考えたことを、今ある自分の立場から、あれこれ書いてみたい。とくに「東アジア」・「人に会いに行く」・「体を動かす」ことを軸に、私にとっての〈Tourism〉を少しでもお伝えできればと思う。

東アジアが見えたツアー

では、まず初めに、東アジアとツアーについて書いてみたい。私自身、いまの東アジアが歴史的にどう作られてきたのか、その中で人びとがどう生きてきたのかということに関心があるので、どうしても東アジアという文脈に引き付けてツアーを過ごしてしまう。また、2010年は東アジアがいろいろと騒がしかった。そんな東アジアでツアーすること、また、ツアーから見えてきた東アジアがあった。

・ 抜け落ちる台湾

2009年8月、「第一回韓日青年平和フォーラム」に参加した。主催は、韓中日共同の歴史認識を目指して積極的に活動している「アジアの平和と歴史教育連帯」で、日本でも代表的な強制労働地域-福岡を主催地として、韓国と日本から約40名が参加した（中国からの参加は新型

ウィルスの関係で参加は見送られた)。「日本の戦争責任と東アジアの平和」というテーマのもと、5日間の日程で行われた。

主なスケジュールは、近代日本資本主義の象徴でもある筑豊炭坑をまわり、強制労働させられた朝鮮人や中国人の痕跡を追いながら帝国日本と財閥・企業の結託で行われた強制連行の構造と実態を、グループ討論や議論を重ねながら考えた。そして、過去の清算と未来への提言について考えた。話題は広がり従軍慰安婦や被爆者についても議論された。この5日間で、多くの参加者それぞれが真摯にこれらの問題に向き合い、自分たちの関わり方で活動・行動をしていることに強い感銘を受けた。と同時に、始終気になることがあった。

フォーラムでは、韓日中の関係性のなかで大日本帝国の植民地主義の暴力について議論されながら、しかし、大日本帝国最初の植民地にされた台湾について言及されることがほとんどなかった。設定された枠組みが韓日中だったことを考えればやむを得ないのかもしれない。だが、そもそもなぜ韓日中という枠組みが設定されたのか、そして、いまの東アジアのなかで台湾はどう位置づけされているのか、このことが今でも気になっている。

おそらく、東アジアにおける諸々の政治的事情が関係しているのだろう。特に1970年以降、中華人民共和国が正当な「中国」として世界に台頭し始めたことで、台湾が、韓国や日本、そして中国と国家間レベルでどんな交流関係にあったのか。そして、国同士の交流関係は、教育やメディアなどを通して、それぞれの地域に住む人たちの意識に大きく影響を与えるだろう。つまり、韓日中という枠組みから台湾が抜け落ちてしまった理由を歴史的背景から考えるなら、今の東アジアがどんなイニシアティブによって作られ、また、それぞれの地域に住む人たちの意識に台湾がどう認識されているのか、そんな問いかけを、フォーラム参加者たちと実際に言葉を交わすなかで強く考えさせられた。

・韓国・台湾でのツアー

しかし、当然のことながら、東アジアの見取り図を描くことはそう簡単ではない。そして、参加したツアーによってもずいぶん見え方が変わってくる。

昨年の夏、「台湾東アジア歴史資源交流協会」(以下Eaphet)が主催した韓国と台湾でのツアーに参加した。“作られる”という視点で韓国・台湾・沖縄の「被害」「対立」の意識を考えるツアーだった。そんな問題意識を彷彿とさせる出来事が、2010年の東アジアで立て続けに起き

た。それは5月の韓国哨戒戦沈没事件に始まり、漁船衝突事件によって尖閣諸島領土問題がメディアを賑わせたことは記憶に新しい。

断片的ではあるけれど、これら事件に関する報道を日本で見ていた限り、北朝鮮や中国を「脅威」「敵」と見なす言論が多かった印象を受ける。そうして日本国内に危機感を煽りながら、その背景に当時座礁に乗り上げていた普天間基地移設問題を連想することは、決して深読みではないだろう¹。

そして、尖閣諸島領土問題では、中国で反日批判が展開され、日本では反中批判が行われた。しかし、一見「対立」しているようにも思えるこの構図は、中日国内のナショナリズムを高揚したという意味において、その目的は一致していたのではないか。むしろ、考えたいのは、こうした言説ゲームに踊らされてしまう、言い換えれば、実際に「対立」させられようとしているのは誰たちなのだろうか。

こうして作られた「対立」は、東アジアで生活をする人びとにさまざまな様相をもって影響を及ぼす。日本に住む中国や韓国からの留学生や研修生、在日の人びとへ、それはときに陰湿なイジメとして、また、あからさまな暴力として、火に油を注いだようにエスカレートしていく。

そんな「対立」が意図的に作られるいまの東アジアを、私たちはどう生きていくのか。「対立」を受け売りし生きていくのか、それとも、「対立」の構図を乗り越えていく交流のあり方を模索することはどうできるのだろうか。Eapeht主催の二つのツアーは、このような問題意識を自分の課題として考える機会になった。

韓国ツアーは6月27日から7日7日に、台湾ツアーは8月23日から8月30日の日程で行われ、台湾・韓国・沖縄・日本に暮らすメンバーがツアーに参加した。繰り返しになるが韓国ツアーでは「作られる「被害」意識-韓国・台湾・沖縄の今」が、台湾ツアーでは「作られる“対立”意識-台湾・沖縄・韓国の今を考える」というテーマが掲げられた。共通する“作られる”という視点から「被害」「対立」のあり方を考え、それを乗り越えていく新しい交流のあり方を、生活を共にするなかから模索してきた。両ツアーの具体的な内容についてはEapeht発刊の報告書が詳しい。そして、参加者一人ひとりがこのツアーとどう向き合ったのか、その声が紹介されていて大変興味深い。

だが、今すぐ劇的に状況が変わるとは考えにくい。しかし、言葉が、(広い意味での)現実を作っているという立場に立てば、いまある現実を解き明かしていくのも、また、新しく作っていくの

も言葉なのかもしれない。こうして実際に会って交流するなかで交わされた言葉が、今の現実を少しずつ変えていくのではないかと信じたい。

ツアーで考えたこと

ツアーではいろいろな場所をめぐる。そして、人に会う。ツアーの核になるのはまさに、人に会うこと、そして、体を動かすことだ。次にこれについて書いてみたい。ただ、ツアーの倫理的な側面と関わる少し抽象的な内容になるだろうし、自分自身の動揺を内含した記述になると思う。

・人に会いに行く

ツアーでは、人に会いに行く。例えるなら、ルーのないカレーはただの白いご飯でカレーにならないのと同じで、人に会いに行かないツアーはどこかツアーになりきらない。だから「人に会う」ではなく「会いに行く」という、ちょっと積極的なニュアンスを持たせたい。人に会う場・機会を積極的に作る。だから「人に会う」よりも「会いに行く」。そういった言ったほうが、色んな意味でのツアーらしさが伝わる気がするし、私にとってのツアーも「会いに行く」と言ったほうがなんかしっくりとくる。

とはいえ、予期せぬ偶然の出会いもある。これこそが、ツアーをより一層充実したものにしてくれる。「あんたたちどこから来たの？」から始まる何気ない会話から、思わぬ繋がりや情報が得られたり、貧乏ツアーで食料難の私たちに食事を振舞ってくれる人たちと出会えたりして、こうした偶然の、何気ない一つひとつにツアーの楽しさを感じたりする。けれど、人に会いに行かなかったツアーに参加した記憶がない。少なくとも、私が参加したツアーでは人に会いに行った。その意味で、観光や旅とは性格が少し異なるのかもしれない。

しかし、なぜ人に会いに行くのだろうか？それは多分にその人に会って話しをしたい、話を聞いてみたいからだろうし、メンバーそれぞれその時々でその目的も変わってくるに違いない。だが、誰の話でもいいというわけではなく、やっぱり何らかの目的があってその人に会いに行くことが多いのではないだろうか。考え方によっては、そうした出会い方はどこか不自然な印象を受ける(が、誰と会ってもそう感じるのかと言われれば、一概にそうでもない)。

私は話を聞きに行くことが悪いとは思わないし、ツアーでは「話を聞く」ことを繰り返してき

た。ただ、私が不自然さを感じてしまう理由の一つは、例えば、書く側と書かれる側、見る側と見られる側の間に横たわる、ある種の権力関係と相通するような力の不均等を、会いに行く側と会いに来られる側の間にも感じざるをえないからだ。と同時に、この違和感の裏を返せば、なぜ私(たち)は話を聞きに行くのか、その人に会いに行くのか、という理由(あるいは資格性)が強く問われていることに気づく。

こうした不均等な力関係の非対称性は、特にサイドのオリエンタリズム批判以降、アカデミックな領域では「知の植民地主義」を問い直す一つの契機として着目されてきた²。だが「知の植民地主義」的状況は、アカデミックな領域だけに存在するのだろうか。また、普段の生活を考えてみた場合、そうした力関係はもう少し複雑に絡まりあいながら存在していると思うし、人にとって話を聞く場・機会を作ることも、不均等な権力構造に支えられているのかもしれない。

こうなると私の場合、身動きが取れなくなるか、とりあえずやってみるというような、極端な二者択一の議論に直面させられる。しかし、やる・やらない、という議論の立て方よりも、出合いのあり方(どう出会うのか)、話の聞き方(どう話を聞くのか)といった、その場・その人と自分自身の向き合い方を考えたい。

お互いの立場(性)は、初めからそこに決まって存在しているというよりは、ある具体的な関係性のなかで-多くの場合、誰が何を言ったのか、言いうるのか、その発話や表象によって-徐々に作られていく側面が強いだろう。だとすれば、こちら側の一方的な解釈や理解で互いの関係を決めてしまう危険性に敏感でありたい反面、お互いの関係性を徐々に一緒に作っていくこともまた可能なのではないか。

遠くまで出かけていくツアーだと、その後の関係をどう継続させていくのが難しかったりする。そのぶん、近場のツアーだと関係を継続させやすいのかもしれない。しかし、それは、距離の問題というよりも、その人・その場と自分自身の距離のとり方の問題という気がしてくる。古川ちかしさんがいうところの「ひき逃げ」の意味を、ツアーが終わって日常に戻ったふとした瞬間に考えさせられる。

・体を動かす - 広い意味での経験 -

これまでのツアーでも、また、本や映像などからも、沖縄戦に関する話を聞いたり読んだりする機会がある。捨て石にされた沖縄で地上戦が行われ銃弾が飛び交い、たくさんの人が殺さ

れて…とその惨劇を伝えるものが多い。ただ、正直に告白すると、惨劇が繰り返されたことは分かるが、私の場合、話の理解はそこで終わってしまう。しかし、一方で、沖縄戦の話に涙を流す人がある。同じ内容の話聞きながら、感じ方がぜんぜん違うのだ。

これはなにも沖縄戦に限ったことではないし、沖縄戦の話聞いて涙が流せるように努力しましょう、と言いたいのもない。なぜ人によって話の聞き方や受け止め方がそれぞれ異なるのか、それは何に起因するのだろうか、育った環境か、それとも感性の違いか…といった答えのない一人問答をツアーのたびに繰り返しては、うーんと唸るしかなく、考えがうまくまとまらずに、この話題はいつも棚上げされてしまう。そこで、久しぶりにこの話題を棚から下ろし、言葉にしてみようと思う。

まず、この話のきっかけとして、畑中敏之さんが、アテネ世界陸上選手権大会の女子400メートルで優勝したフリーマンさんと、小説『水滴』で芥川賞を受賞した目取真俊さんのコメントを紹介しながら述べた「広い意味での経験」について考えてみたい³。

畑中さんは、フリーマンさんが優勝したときに新聞のインタビューに答えた「自分の民族を誇りにしている。先祖の力を体の内側に感じる」というコメントを取り上げ、次のように述べている。

フリーマンさんがそのように感じるのは、彼女がアボリジニーに生まれたからではない、それが自動的に発露して感じさせられるものでは決してありえない。フリーマンさんがそのように感じる、それは彼女がアボリジニーに生まれたことによるのではなく、アボリジニーとして育ったことによると⁴。

また、目取真さんが受賞のさいに「しんぶん赤旗」に答えた次のコメント、「それ(筆者註:自分の肉親から聞いた沖縄戦の経験)が遠い昔のことではなく、自分につながったものと実感できます」に着目し、目取真さんが戦争を題材にした小説を書く理由についてこう書いている。

彼は沖縄に生まれたから戦争を書く作家になったのではない。自分につながったものを実感できる何かがあるからこそ、戦争をモチーフにして小説を書く。それは単に沖縄に生まれたからではなく、自分につながったものを実感できる固有の体験があるか

ら、父親や祖父の聞き取りもふまえての体験があるからだという⁵。

そして、フリーマンさんに「先祖の力」を感じさせ、また、目取真さんに「(沖縄戦が)自分にながったものと実感させるもの」は、「広い意味での経験」だと畑中さんという。つまり、フリーマンさんが「先祖の力」を感じ優勝したのも、目取真さんが沖縄戦を実感し戦争を題材に小説を書くのも、それはアボリジニーだから、沖縄人だからという「出自」に全てを還元してしまうのではなく、「広い意味での経験」がフリーマンさんと目取真さんにそう感じさせ実感させたのだ。

さて、この畑中さんがいう「広い意味での経験」は、「なぜ聞き方に違いがあるのか」という先ほどの疑問と、どう繋がるだろうか。少し強引だがここに「体を動かす」を梃子にすることで、その接点を探ってみよう。

自分の体を「よっこいしょ」とある場所へ持って行く。体を動かすことは、自分の腰をあげてみることから始まる。そして、体を持って行って、寒いとか暑いとか疲れたとか楽しいとか、そんなことをうだうだ言いながら色々と感じてみる。「体を動かす」とは、つまるところ、それだけの話だ。しかし、それだけのことが意外と難しいし、畑中さんが言う「広い意味での経験」に繋がっていくのではないかと思うのだ。

もちろん、体を動かさなくても「広い意味での経験」をすることが可能なのかもしれない。映画やドキュメンタリー、書籍などさまざまな媒体からたくさんの情報が得られるし、人に直接会わなくても話を聞くことが可能な時代になった。活用できるものは存分に利用したほうがいい。ただ、私は、「体」という媒体を通して得られる情報には違いがあると思う。温度や気候、匂いといった直接的な感覚や刺激は体を通すことでしか得られないというその一点において、だ。お前は肉体至上主義者か！？と言われそうだが、私がこう考えるのには自分の体験と関係してくる。

2006年の沖縄ツアーで、沖縄県の伊江島にある反戦平和記念資料館を訪れた。ここには伊江島の土地闘争や沖縄復帰運動で使われた旗や横断幕、米軍のパラシュートなどが展示されており、実際に手に取って触ることが出来る。私が手にした銃弾も展示品の一つだった。すでに錆付いてざらざらとしていた銃弾だったが、驚いたのは、その重さだった。ずっしりと重い感触を私に残したその銃弾。この銃弾の重さがいまでも沖縄戦の話を書く大きな受け皿にな

っている。たった一つの銃弾の“重さ”が、沖縄戦に対する私の向き合い方を変えた。

私にとって体を動かすとは、ある一つひとつの出来事が自分につながったものと実感させる「広い意味での経験」を、具体的な物、場所、人との関係において自分のなか感じさせることなのかもしれない。ただ、理解すべき言葉や経験と克服してはならないそれらがあるように思う。その区別は、私の勝手な解釈で相手を理解する力関係を見つめなおすうえでも重要であろう。

・感想会

こう考えてみると、体を動かすことは、意外に繊細なのかもしれない。体を動かす、体で考えること、お勧めしたいです。是非いちどお試しあれ。

さて、ツアーには、五感すべてのアンテナを張り巡らせてキャッチした電波を、自分の言葉に乗せてメンバーに発信してみる機会がある。それが「感想会」だ。感想会はその名の通り、感想を言い合う会だが、自分の意見をいいつつ、メンバーの意見をききつつするなかで、自分の考えを相対化させてくれる貴重な時間だ。だからこそツアーでは三度の飯より感想会が重視される(嘘です、ご飯ちゃんと食べます)。

ツアーは大抵の場合、この「感想会」で一日のスケジュールが終わる。一人ひとり千差万別の感想が飛び出し、千言万語費やしても上手く自分の思いが伝わらないこともある。よって(ちょっと汚いけれど)言葉・思想の「便秘状態」に陥ることもしばしば。もちろんうまく排泄されれば爽快だが、そんな快感はごくたまにしか味わえない。

それぞれの感想を持ち寄ってみると、あの人はこんなこと考えたんだ、とか、同じ話を聞いていたのに聞き方がぜんぜん違うな、とかたくさんの気づきがあって面白い。そして、感想会には何か絶対的な答えがあるわけはなく、また、そんな答えを出そうとするのでもなく、みんな言葉積み上げていく。で、誰かの発言でそれがまた崩れて…を繰り返す。

本稿の最初で、今の現実を解き明かしていくのも、新しく現実を作っていくのも言葉なのかもしれないと述べた。感想会は、自分たちをも含んだ広い意味での現実をみんなで一緒にああだこうだ言い合いながら考えられる、ツアーには欠かせない貴重な時間だ。

さいごに

ツアーについてあれやこれやと思うままに筆を走らせた。ここまで書いて、やはりツアーについて自分は何が書けたらとうかと自問してしまう。それでも、ツアーにはこれからも参加していきたいし、積極的に企画していけたらと思う(とくに、いま東アジアを考えるうえで中国の存在は歴史的にも重要だし、台湾の「これから」を考えるうえで無視できないだろう。実現はそう簡単ではないだろうけど、機会があれば次は是非中国でツアーしたい)。

では、最後に、あれこれ書き連ねてきたツアーについて、筑豊に住みながら炭坑の生活を記録した作家・上野英信さんに関する次のエピソードを紹介して本稿を閉じたい。

英信さんの息子である朱さんは、木を植えるのが好きだったという父についてこう書き記している。

「人気作家」や「時代の寵児」といった評価とは全く無縁の荒れ地で、父はどんぐりを拾い集めるように人びとの話を聞き歩き、鉄の棒で大地に穴をあけて種を捲くように原稿用紙のマス目を埋めていったのだろう。いつ芽が出るかわからない。全く出ないかもしれない。もし芽吹いたとしても、その姿を見ることはかなうまい。でも、播いていく⁶。

芽がいつ出るのかもわからず、仮に芽吹いたとしてもそれを見られるかどうかわからない。しかし、それでも播く。そこに込められた思いは未来への期待ではないだろうか。

混沌とした社会のなかで、今自分が身をおくアカデミックな場所がどんな意味を持つのか、正直分らない。ただ、それでも、いま自分に出来ることを、未来へのちょっとした期待を持ちながら一つひとつ粘り強くやっていたらと思う。ツアーにもそんな期待を込めてしまう自分に、いまふと気づかされた。

(とみながゆうすけ 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)

注

1. 国家戦略担当相・玄葉光一郎氏は漁船衝突事件の後「(今回の衝突事件で)日本人が日米安保の重要性、離島防衛の必要性を再認識する契機になった」と発言した(沖縄タイムス2010年9月26日付)。この発言は、名護市議会選で与党が圧勝し辺野古への移設はますます難しくなった状況において座礁

- に乗り上げていた普天間基地移設問題を意識したものであることは間違いないだろう。
2. 太田好信『増補版トランスポジションの思想』(世界思想社、2010)。特に序章と第三章を参照。
 3. 畑中敏之「〈ひとくり〉と〈ひとりひとり〉」、『「部落民」とは何か』(阿吽社、1998、12-33頁)。
 4. 同上(15頁)。
 5. 同上(17頁)。
 6. 上野朱『父を焼く 英信と筑豊』(岩波書店、2010、6頁)。

引用・参考文献及び資料

- 上野朱 『父を焼く 上野英信と筑豊』 (岩波書店、2010)
- 太田好信 『増補版 トランスポジションの思想』 (世界思想社、2010)
- 畑中敏之 「〈ひとくり〉と〈ひとりひとり〉」、藤田敬一編『「部落民」とは何か』 (阿吽社、1998)
- 『沖縄タイムス』 (2010年9月26日付け朝刊)